

議員派遣報告書（閲覧用）

平成26年3月19日

岐阜県議会議長 様

岐阜県議会議員 小原 尚 印

岐阜県議会議員 加藤 大博 印

下記のとおり議員派遣業務が終了しましたので、報告します。

派遣目的	国民総幸福量(GNH)と政府の諸政策、伝統、文化等との関わりと近代化に伴う諸課題について調査
行程表（別紙のとおり）	
派遣成果（詳細は別紙のとおり）	
日付	成果の概要
H25.11.10	(ブータン王国 ディンプー県ディンプー) ・マーケット（青果市場・手工芸品市場）視察 ・中央行政庁舎、寺院等視察 ・ノルブ・ワンチュク経済相との懇談、意見交換
H25.11.11	(ブータン王国 ディンプー県ディンプー近郊) ・史跡（ドチュラ・峠）・寺院等視察 (ブータン王国 ディンプー県ディンプー) ・競技場、僧院等視察 ・菅ブータン政府観光局職員と懇談、意見交換
H25.11.12	(ブータン王国 ディンプー県ディンプー近郊) ・国立織物博物館視察 ・伝統生薬研究所視察 ・民族博物館視察 ・ペケル・スクール（私立小中高一貫校）視察 (ブータン王国 パロ県パロ) ・パロ・ゾン（県庁舎）視察

H25.11.13	<p>(ブータン王国 ディンブール県ディンブール)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キチュ・ラ・カン (ブータン最古の寺院) 視察 ・ボンデ・-ファーム (西岡農場) と農業振興に関する視察 ・ウーチュ・ローワー・セカンダリー・スクール (公立小中学校) 視察
-----------	---

県政に活用できる事項

県担当課	内 容
清流の国づくり推進課、人づくり文化、観光課、国際戦略推進課、社会教育文化課	<ul style="list-style-type: none"> ・地域資源の活用に関する取り組みと観光政策 ・文化財の保護と活用に関する取り組み ・民族・宗教・道徳教育に関する取り組み
清流の国づくり推進課、ひとづくり文化課、統計課	<ul style="list-style-type: none"> ・幸福度 (生活満足度) に関する施策とその調査方法

【 行程概要 】

月日	移動・宿泊	視察先
11/9 (土)	中部国際空港 →バンコク バンコク泊	(移動日)
11/10 (日)	バンコク→パロ パロ→ティンパー ティンパー泊	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ティンパー</div> (1) サブジ・バザール (青果市場) (2) クラフト・マーケット (手工芸品市場) (3) タシチョ・ゾン (中央行政庁舎) (4) クンスルフォラン (仏像) (5) メモリアル・チョルテン (仏塔) (6) ノルブ経済相と懇談
11/11 (月) ブータン の休日	ティンパー泊	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ティンパー近郊</div> (7) ドチュ・ラ (峠) (8) シムドカ・ゾン (セムドカ・ゾン) <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ティンパー</div> (9) チャン・リンメ・タン (競技場) (10) デチェン・ホダン (11) 菅茜ブータン政府観光局職員と懇談
11/12 (火)	ティンパー→パロ パロ泊	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ティンパー</div> (12) ロイヤル・テキスタイル・ミュージアム (国立織物博物館) (13) ファーマ・シティカル (伝統生薬研究所) [トラディショナル・メディシナル・ホスピタル内] (14) フォルク・ヘリテージ・ミュージアム (民族博物館) (15) ペケル・スクール (私立小中高校) <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">パロ</div> (16) パロ・ゾン (県庁)
11/13 (水)	パロ→バンコク	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">パロ</div> (16) キチュ・ラカン (寺院) (17) ボンデ・ファーム (西岡農場) (18) ウーチュ・ローワー・セカンダリー・スクール (小中学校)
11/14 (木)	バンコク →中部国際空港	(移動日)

※面談者の都合などにより、当初の予定と一部変更した。

海外視察派遣報告

◇視察先 ブータン王国

◇日 程 2013年11月9日～14日

岐阜県議会議員 小原 尚

岐阜県議会議員 加藤 大博

視察の目的

- ブータン王国と同様、豊かな自然環境や伝統文化を保存し、継承していかなければならない本県であるが、現在は、急速な少子高齢化や人口減少の途上にある。こうした状況の中、時代に相応しい新しい価値観を模索していくことは、県民の幸福に資するという県政の目的に適うものであると考える。
- 同王国の国民総幸福量（GNH: Gross National Happiness）は、同王国において開発を進める際、最も重要視される概念であり、以下の4点を柱としている
 - (1) 公正・公平な社会経済の発展
 - (2) 文化遺産の保護と伝統文化の継承・振興
 - (3) 豊かな自然環境の保全と持続可能な利用
 - (4) 良き統治
- 急速に変化しつつあると言われるブータン王国内の情勢視察を行い、その現状と課題、またブータンの一般国民がどのような価値観を持っているのか考察する。

視察の概要

- 国民総幸福量(GNH)と政府の諸政策、伝統、文化等との関わりと近代化に伴う諸課題について調査を行う。

ブータン王国概要

- ① ブータン王国概要
- ② ブータン王国略史
- ③ 政治体制
- ④ 内政
- ⑤ 外交
- ⑥ 経済

ブータン王国概要①

- 通称ブータンは、南アジア、インドと中国の間にある友邦国。
- 世界で唯一チベット仏教(ドゥク・カギユ派)を国教とする国家。
- 民族はチベット系8割、ネパール系2割。第1公用語はゾンカ語、第2公用語は英語。
- 国旗はかなり複雑なもののひとつで、竜のうろこが細かく描かれている。
- 国花はメコノプシス=ホリドゥラ、国樹はイトスギ、国獣はターキン、国鳥はワタリガラス、国蝶はブータンシボリアゲハ。

ブータン王国概要②

- 面積 約38,394平方キロメートル
→ 九州とほぼ同じ大きさ
- 人口 約73.3万人
- 首都 ディンプー
- 民族 チベット系、東ブータン先住民、ネパール系等
- 言語 ゾンカ語(公用語)等
- 宗教 チベット系仏教、ヒンドゥー教等
- 所得 一人当たりの国民所得 US \$ 1,321

ブータン王国所在地



ブータン国旗



ブータン王国略史①

- 17世紀、この地域に移住したチベットの高僧ガワン・ナムゲルが、各地に割拠する群雄を征服し、ほぼ現在の国土に相当する地域で聖俗界の実権を掌握。
- 19世紀末に至り東部トンサ郡の豪族ウゲン・ワンチュクが支配的郡長として台頭し、1907年、同ウゲン・ワンチュクがラマ僧や住民に推され初代の世襲藩王に就任、現王国の基礎を確立。

ブータン王国略史②

- 1952年に即位した第3代国王は、農奴解放、教育の普及などの制度改革を行い、近代化政策を開始したが、1964年、地方豪族間の争いに起因する当時の首相暗殺や、その後に任命された首相による宮廷革命の企み発覚を契機に、首相職が廃止され、国王親政となった。
- 1972年に16歳で即位した第4代国王は、第3代国王が敷いた近代化、民主化路線を継承・発展させ、王政から立憲君主制への移行準備を主導。

ブータン王国略史③

- 2006年12月、第4代国王の退位により、現国王（第5代目）が王位を継承。
- 2007年12月及び2008年の総選挙を経て、2008年4月に民主的に選出されたティンレイ政権が誕生し、5月には国会が召集され、7月に憲法が施行し、王政から議会制民主主義を基本とする立憲君主制に移行した。
- 2008年11月に、現国王の戴冠式が行われた。

（外務省HP参照）

政治体制

- 政 体 立憲君主制【憲法は2008年施行】
- 元 首 ジグミ・ケサル・ナムギャル・ワンチュク国王
(第5代)
- 議 会 二院制(上院25議席、下院47席)

◇ 政治体制は日本とほぼ同様

内政①

第4代国王主導により、90年代末から憲法制定委員会の設置など、議会制民主主義への移行準備が進められ、2006年12月に即位した第5代国王の下、2007年12月に上院議員選挙が、2008年3月に下院議員選挙が実施された。これを受け、憲法草案に基づき、2008年4月、下院議員選挙において勝利したブータン調和党(DPT)のジグミ・ティンレイ党首が国王により首相に任命され、新内閣が発足した。2008年5月、新国会が召集され、憲法等の法案審議が開始され、7月、憲法が採択された。

内政②

2011年5月、民主政権下初の地方選挙が予定されていたが、立候補者の政党離脱手続きの不備問題が相次ぎ、実施が危ぶまれた。

これに対し、関係者からの訴えに応えるかたちで、国王から、国家の調和、憲法の尊厳、法の強化、民主主義の成功の観点から関係者間の協議を促す布告が発出され、最終的に同年6月に地方選挙を実施。

全国20県にまたがる205郡議会、16県の県庁所在地代表(ティンプー県、チュカ県、サルパン県、サムドゥプ・ジョンカル県を除く)欠員となっていた地区長が選出された。同年12月には欠員補充のための第2次地方選挙が実施された。

2013年7月には、第2回総選挙が実施され、これまで野党であった国民民主党(PDP)が、ブータン調和党(DPT)に勝利、ツェリン・トブゲー党首が国王により首相に任命された。

内政③

インドと国境を接する南部地域では、90年代末以降インド・アッサム州での分離独立運動を行っている過激派組織が進出したため、2003年にブータン政府により掃討のための軍事作戦が行われた。

(外務省HP参照)

外交①

- 非同盟中立政策を外交の基本方針としつつ、近隣諸国との関係強化を図っている。1971年に国連に加盟。
- ブータンは、1980年代に入るとバングラデシュ、ネパールを始めとする近隣諸国の他、日本、西欧等との間で外交関係を樹立する等対外関係を拡大し、2001年には豪州、シンガポールと、また、2003年にはカナダとも外交関係を正式に樹立した。
- 現在、52カ国及び欧州連合との間に外交関係を有している（国連安保理常任理事国とは外交関係を有さない）。

外交②

- 地域協力機構として1985年12月に発足したSAARC(南アジア地域協力連合)を重視し、その発展のため積極的な対応を行っている(ブータンは原加盟国)。2010年4月には、首都ティンブーにてSAARC首脳会合を開催。
- 2004年4月にはACD(アジア協力対話)に加盟した他、2004年8月にはBIMSTEC(多面的技術経済協力のためのベンガル湾構想)に加盟した。

外交③

- インドとは、1949年のインド・ブータン条約により特殊な関係（対外政策に関するインドの助言）にあったが、2007年3月の改定により同助言に関する条項は廃止され、経済協力、教育、保健、文化、スポーツ及び科学技術の分野での協力関係の促進を謳った新たな規定が盛り込まれた。

外交④

- 1980年代のブータン政府の国家のアイデンティティ強化施策(例:ゾンカ語の普及, ブータン式の服(「ゴ」「キラ」)の公式の場での着用義務づけ等)が、国内のネパール系住民の反発を招き、1990年秋に南部ブータンで一部ネパール系住民による反政府デモが展開され、反政府活動グループと警官隊との衝突で死傷者が出る事件などが発生。



1990年以降、10万人を超えるネパール系
ブータン難民がネパール国内に流入

外交⑤

- 2007年11月より第三国定住プロセスが開始され、一時10万人を超えたキャンプ内の難民数も2011年には6万人台へ減少。
- 難民の第三国定住プログラムとしては世界最大規模となっている。2014年末には、プログラム終了の見込み。
- 2011年4月、ティンレイ首相のネパール訪問の際、2003年から中断していた両国政府による難民帰還に関する協議再開に合意した。

(外務省HPほか参照)

経済①

- 主要産業 農業、林業、電力(水力発電)
- 経済成長率 9.4%(2012世銀資料)
- インフレ率 9.5%(2012ブータン政府資料)
- 失業率 2.1%(2012ブータン政府資料)
- 通貨 NU(ニュルタム) 1nu=約1.73円
- 識字率 63.02%(2012年)
- 初等教育就学率 96%(2012年)
- 乳児死亡率 6人/1,000人(2012年)

経済②

- 1960年代以降の近代化政策の推進により、自給自足経済から市場経済への堅実な移行が進められている。
- GDP成長率は2002年 - 2008年（第9次五カ年計画、08年まで一年延長）で平均9%、2007年には、タラ水力発電所稼働開始に伴い18%の高成長を達成したが、2008年は4.7%、09年は6.7%、10年は11.8%、2011年は8.5%、12年は9.4%であった。
- 2012年のGDPは17.76億ドル、一人あたりGDPは2,399ドルを記録した。
- 産業別のGDP構成比（2011年）は、建設16.26%、農林業15.9%、電力セクター13.92%、製造業8.23%、鉱工業2.27%、福祉・教育サービス業が12.79%となっている。

経済③

- 2011年の貿易額は、輸出額298.9億NU(約5.27億ドル)、輸入額538.6億NU(約8.15億ドル)であり、貿易収支は239.9億万NUの赤字であった(10・11年度平均為替レート:1米ドル=46.7NU)。
- 主要輸出相手国(2011年)は、第1位から順に、インド、香港、バングラデシュ、日本、イタリア、
- 主要輸入相手国(2011年)は、インド、韓国、シンガポール、日本、タイとなっている。
- 主要輸出品目(2011年)は、珪素鉄、電子部品、鉄または非合金鋼、セメント等であり、全輸出品目の85%以上を占めている。
- 主要輸入製品(2011年)は、軽油、ガソリン、金属製品、小型掘削機、石炭、米等であり、全輸入品目の50%以上を占める。

経済④

- ほとんど全ての消費財や資本財をインド及び他国からの輸入に依存しているため、貿易収支は恒常的に赤字で推移し、1990年代後半以降、大規模な水力発電プロジェクトの推進によりこの傾向に拍車がかかった。
- インドからの大型水力発電プロジェクトが一段落した2007年は、経常収支が黒字に転じたが、2008年以降は再び赤字となっている。2012年1月の国会では、外貨準備高のインド・ルピー不足問題が取り上げられ、財務大臣の下に対策を検討するためのタスクフォースが設置された。
- インドとの輸出入が圧倒的なシェアを占める中で、インド・ルピー以外の外貨収入を得る手段として豊かな観光資源の開発も重要な課題となっている。

経済⑤

- 人口の7割が農村地域に居住し、小規模な地域自給自足型の労働集約的農業を中心とした農業に従事している。
- 経済活動を行う労働力は全人口の64.4%（約47万2千人（2012年））。
- 業種別・形態別では、農業が依然として労働力の59.4%を占める主要セクターとなっているほか、急速に拡大する労働市場において民間部門が雇用機会を創出する重要な要素となってきた。
- 失業率は2.1%（2012）であり、失業者全体に占める15歳～29歳の年齢層の割合は65.45%となっている。また、都市部においては、雇用機会を求める若者の増加を背景として、失業率は比較的高くなっている（3.5%、2012年）。

経済⑥

- 対外債務は1990年代後半以降増加傾向を強めており、2011年6月現在1459.4百万ドルとなっている。対GDP比率は、2008年には67%、2009年には70.3%、2010年には63.5%となっている。
- ブータンの対外債務の特徴として、インドからのルピー建債務の割合が58.1%（2010年6月）を占めること、政府借入れの大半がODAローン（ソフト・ローン）であり、中長期の譲許的債務であること、商業借入はわずかであること（ドル建て債務の3.4%、2010年6月）等があげられる。

経済⑦

- ブータンでは、通貨ニュルタムがインド・ルピーに連動（ニュルタム：ルピー＝1：1）しているうえ、インドからの輸入が7～8割を占めることから、国内の物価がインドのインフレの影響を強く受ける性質がある。
- 開発の原則として、国民総生産（GNP）に対置される概念として、国民総幸福量（GNH：Gross National Happiness）という独自の概念を提唱している。

（外務省HPほか参照）

Norbu(ノルブ)経産相 との意見交換

2013. 11. 10

ディンブー市内



ノルブ(Norbu)経産相との意見交換会

ノルブ大臣からブータンの経済や観光に関する基本的な考え方をお聞きした。

Norbu (ノルブ) 経産相との意見交換

〈概要〉

- ブータンは、インドへの経済的依存度が非常に高い。
- インドは非常に重要な国だがインド頼みにならない経済運営・外交が求められている。
- 消費財はほとんどインドからの輸入に頼っている。
- ブータン経済の自立のためにも、資源開発を進めて行く考え。豊富な水資源を利用した水力発電を行いインドへの電力供給を行っていく考え。
- 都市部では建築ラッシュで、基盤整備も進みつつある。しかし、ブータン人は、肉体労働によって対価を得る事を嫌うため、そうした土木事業の担い手はインドやネパールからの労働者がほとんどを占めている。ブータン国内の雇用の安定や、職種増による労働市場の拡大のためにも、そうした弊害を取り除いていきたいと考えている。
- 観光は、外貨獲得のために非常に有用な手段と考えている。しかしながら、自分たちの文化や生活を安売りするつもりはなく、そうしたものを深く理解してくれる良質な旅行者に限定したものにしている。(観光税として公定滞在価格が決められている)

Norbu (ノルブ) 経産相との意見交換

〈考察〉

- インド経済への依存度が非常に高い状態にあるが、電力開発などによって、そうした状況の是正に取り組もうとしている。
- 観念的に肉体労働により対価を得る事を嫌う風潮があるが、農業に偏った労働者割合を是正するためにも、そうしたものを払拭していく努力が必要と考えている。
- 観光は外貨獲得の大きな柱であると認識している。しかし、良質な旅行者に限定したものでなければ、自分達の生活や文化を犠牲にしてしまう。とも考えている。

〈所感〉

- 観光の在り方に対して非常に興味をもった。ブータンで観光するためには政府に対して多額の費用を支払う必要がある。自分たちの育んできた文化や伝統に誇りを持っているからこそ、そうしたものに対する対価をきちっと求めることができていると感じる。
- ブータン人は幸せですか？の問いに、にっこり笑いながら、皆さんはどう思いますかと聞き返された事が印象的だった。

菅茜氏（ブータン政府観光局職員） との意見交換会

2013. 11. 11

ディンブー市内



ブータン政府観光局 菅茜氏(日本)との意見交換会

日本人でありながらブータン政府観光局の職員として働く菅氏とブータンの観光政策について意見交換。

菅茜氏（ブータン政府観光局職員） との意見交換会

〈概要〉

- 菅 茜（すが あかね）氏
 - 東京都出身 29歳
 - JTBに勤務後NGO職員としてブータンに日本語教師として派遣、その後 ブータン政府の公募に応募し奉職
 - 当初1年の契約だったが、慰留され1年延長中

菅茜氏（ブータン政府観光局職員） との意見交換会

〈概要〉

- 観光局での業務は英語が公用語であり、公文書も英語で作成されている
- 待遇は、現地スタッフより高給だが、日本のOLとは比べものにならない。
- ブータンの人々に対する印象は、とにかくマイペースで頑張らない気質。日本人は自分たちを追い込みすぎているのではないか。
- 「世界一幸せの国」とブータンは一度も言ったことがない。日本のマスコミの過剰報道ではないか？

〈概要・観光政策〉

- ブータンの観光政策は「ハイバリュー」・「ローインパクト」が基本。良質の旅行者に限定し、生活や文化に対する影響は最小に。（経産相も同様の発言）
- 欧米人は、トレッキングやエキゾチックな文化を観るために訪れる。
- 日本人は、ブータン人との触れあい、幸せの国の根拠を探そうと訪れる。

菅茜氏（ブータン政府観光局職員） との意見交換会

〈考察〉

- ブータンの観光政策は、「ハイバリュー」・「ローインパクト」の一言に表される。自身の文化や伝統に強い自負を持っているからこそその強気の政策。
- ブータンが自ら幸せの国だと発信したことはないが、多くの人がそうしたものを求めてやってくる。先進国で失われつつある伝統や文化が色濃く残るブータンの日常生活を、魅力的なものとして捉える人々が多くいる。
- 同席した通訳と旅行者の方が、都市部よりも田舎での暮らしの方が良い。また、会社が大きくなることで税金を払い国に貢献できることが嬉しい、と言っていたのが印象的だった。ブータンの人々の価値観を物語っている。

〈所感〉

- ブータンの人々にとってたわいもないものが、私達にとっては懐かしく新鮮なものとして認識される。我々が便利さや豊かさや引き替えに失ってしまったと思われるそうしたものに対する畏敬や郷愁の念が幸福感に繋がる一つの理由ではないか。

政治体制から考察

2013. 11. 10 タシチョ・ゾン(中央行政庁)〈ディンプー〉

2013. 11. 11 ドチュラ峠

2013. 11. 11 ドウツク・ワンゲル・チョルテン

2013. 11. 12 パロ・ゾン〈パロ市内〉



タシチョ・ゾン(中央行政庁舎)

ブータン国王、宗教界のトップであるジェケンポの執務室や、国会、様々な省庁が入っているブータン最大のゾン。ゾンとは、17世紀以降ブータン各地で城塞兼寺院として建てられた施設。現在も、寺院や各地の行政庁舎として使われている。



タシチョ・ゾン(中央行政庁舎)

一本の釘も用いずに建設されているとのこと。また、ゾンは宗教施設としての一面もあるため、正装しなければ入ることができない。



タシチョ・ゾン(中央行政庁舎)

行政庁舎ではあるが、非常に宗教色が強い。



小売店(ドチュラ峠付近)

不法入国を防ぐため、デインプー市内へ出入りする外国人をチェックしているようだ。そのため、車が止められているので下車。ネパール系住民は商売上手でこうした場所で上手に商売しているとのこと。



ドゥック・ワンゲル・チョルテン

ドチュラ峠にある仏塔。ドゥック(竜)・ワンゲル(大いなる力)。2003年12月に起きたアッサムの過激派組織との戦闘による戦没者のために第4代国王の後によって建立。2008年に完成したが、その間多くのボランティアが建設に参加。



ドゥック・ワンゲル・チオルテン

ドチュラ峠、ドゥック・ワンゲル・チオルテンから、ヒマラヤ山脈を望む。
美しい景色だが、そのすぐ向こう側は他国だという感覚は、島国の日本人には分かりにくい。



パロ・ゾン

現在は、パロ県庁兼寺院として使われている。



パロ・ゾン

現在は、パロ県庁兼寺院として使われている。退庁時間が過ぎているため人は少ない。



パロ・ゾン

現在は、パロ県庁兼寺院として使われている。退庁時間が過ぎているため人は少ない。



ボードゲームに興じる大人(パロ・ゾン近郊)

もともとはインドで流行っているゲームとのこと。インドとの結びつきの深さを感じる。

政治体制から考察

〈概要〉

- 先代国王の主導で君主制から立憲君主制への移行が決定し、現国王（第5代）のもとで議会制民主主義への移行がなされたが、国民の、国王と王室に対する絶大な信頼は変わらない。
- チベット仏教の高僧が国土を平定したという経緯から宗教と政治が非常に強く結びつく結果となった。

〈考察〉

- 規模は別として、日本とほぼ同様の政治体制が採られている。
（立憲君主制、象徴としての国王）
- 国民の国王と王室に対する支持は大きく、はじまったばかりの現体制に対する不安感を相殺していると感じる。（王様が直接政治をやった方が良いと考える国民も相当数いるとのこと）
- 政治に対する不満は特に耳にすることは無かった。むしろ政府は良くやっている、自分たちの生活を向上させようと努力してくれている。というような評価が多かった。

政治体制から考察

〈所感〉

- 議会制民主主義を採っているが、まだ選挙は2回しか行われておらず、その意義が国民に浸透しているとは言い難い。しかし、国王が自ら山間部の村まで出向き選挙と議会の必要性を説いたと言う話しかからも、国民が王に対し畏敬の念を抱く気持ちも良く分かる。結果、国王と王室を精神的支柱とすることで、議会制民主主義が成立している様に感じる。
- 政治体制においても王と王室という一つの軸が存在することで大きな安心感が生まれ、そうしたことが、政治に対する満足感や幸福感に繋がっているのではないか。

宗教との関わりから考察

2013. 11. 10 メモリアル・チョルテン(第3代国王仏塔)
〈ディンプー市内〉
2013. 11. 11 シムトカ・ゾン(ブータン最古のゾン)
2013. 11. 11 デチュン・ホダン(僧院)
2013. 11. 13 キチュ・ラカン(ブータン最古の寺院)
〈パロ市内〉
- ・各地に奉納されている祈りの旗 〈ディンプー・パロ〉



メモリアル・チョルテン(第3代国王記念仏塔)

チョルテンはチベット語で仏塔のこと。多くの人がこの仏塔を訪れ、時計回りに回っている。これは、修行の一環とのことで一日中回っている人もいるとのこと。修行とは言え様々な人々が非常に和やかな雰囲気の中で行っている。



メモリアル・チョルテン(第3代国王記念仏塔)

老若男女、僧侶、一般市民関係なく各々のペースで仏塔の周りを周回している。



メモリアル・チョルテン(第3代国王記念仏塔)

老若男女、僧侶、一般市民関係なく各々のペースで仏塔の周りを周回している。



シムトカ・ゾン

悪魔を大きな石で封印しているという名のゾン。ブータン最古のゾンで、当初は、チベット国境の要塞として建設された。2012年までは、言語と文化の学校として使われていたが現在は、純粹な寺院として約100名の僧が住み込みで修業している。



シムトカ・ゾン

悪魔を大きな石で封印しているという名のゾン。ブータン最古のゾンで、当初は、チベット国境の要塞として建設された。2012までは、言語と文化の学校として使われていたが現在は、純粋な寺院として約100名の僧が住み込みで修業している。



シムトカ・ゾン

人が多く訪れる様になった場所には人知れずこの様なゴミ箱が設置されている。何もかもが素朴に感じる。



デチュン・ホダン(僧院)

僧侶になるための学校。子供達が住み込みで勉強している。



デチュン・ホダン(僧院)

授業風景は、撮影禁止だったが、この写真ぐらいの年齢と思われる子供達が勉強に励んでいた。親や本人の希望で僧院に入るとのこと。



キチュ・ラカン

ブータン最古の寺院。チベットを初めて統一したソンツェン・ガンポが7世紀に建てたもの。大きな建物ではないが、重要な寺院として非常に大切にされている。



キチュ・ラカン

中庭には、神聖とされるみかんの木が植えられている。



祈りの旗(ルンタ)

祈りの旗は、仏教におけ5色「天・風・火・水・地＝青・白・赤・緑・黄」を表しており5色で1セット。それぞれに、チベット仏教の経文や風の馬(ルンタ)が描かれている。



道路脇の樹木に付けられた祈りの旗

良く風の通る場所には、必ず祈りの旗(ルンタ)が飾られている。信心深さの表れとを感じるが、自身の願いのためでは無く、他者のために飾り祈ること。



祈りの旗(ルンタ)

パロ川にかかる橋に括り付けられた祈りの旗。ブータンには至る所に祈りの痕跡がある。

宗教との関わりから考察

〈概要〉

- ブータンは世界で唯一のチベット仏教を国教とする国家であり、国民も大変厚く信仰している。
- チベット仏教はダライ・ラマに代表される様に輪廻転生が教義の柱であり大きな特徴。
- 輪廻転生の考え方が社会一般に広く浸透し、社会活動にも影響を与えている。
- 宗教と政治が密接に関係してきた歴史的背景があり、現在も県庁舎などの役所は寺院と一体である。
- チベット仏教の他には土着信仰として凡教がある。こちらは、日本の神道とよく似ており、山や石や川など自然の様々なものに神が宿るものとしている。

宗教との関わりから考察

〈考察〉

- ブータンを訪れると外国とは思えない親近感を覚える。一つは彼らが我々と非常に似た顔立ちだということ。次に、仏教を多くの人が信仰をしており宗教的価値観を共有できるためだと考える。加えてそれ以上に神道的な八百万の神が森羅万象に宿るという考え方が根底にあることが、私達日本人にとって馴染みやすいのではないか。
- チベット仏教を国民は熱狂的に信仰しており、取り分け輪廻転生の考え方に沿って現世での功德をしっかりと積むことを重要だと考えている。そうしたことが、他者への配慮や大らかな雰囲気につながっているのではないか。
- 経済的な理由から仏門に入る子供達もいるが、しっかりとした教育を受けられるため、僧侶の社会的地位は高い。

〈所感〉

- チベット仏教の輪廻転生を柱とした考え方が、社会の隅々まで浸透している。また、そうした信仰が人々の生きる規範や心の拠り所となっていることが良く分かる。絶対的な規範や心の拠り所は、精神的な安定、すなわち安心感や満足感をもたらすことに繋がっているのではないかと感じた。

都市基盤整備の状況から考察

- 2013. 11. 10 パロ国際空港から首都ディンブーへ
- 2013. 11. 10 ディンブー市内(青果市場・民芸品売り場)
- 2013. 11. 11 国立運動場<ディンブー市内>
- 2013. 11. 12 国立織物博物館<ディンブー市内>
- 2013. 11. 12 民族博物館<ディンブー市内>
- 2013. 11. 12 パロ市内



パロ国際空港からデンプーまでの道のり

空気が澄んでいる、空が青い。山あいには川の流れる風景は、どこことなく日本の風景とかぶる。しかし、標高は2000メートルを超えている。温暖な気候のため日本では森林限界だが、樹木が生育している。



パロ国際空港からデインプーまでの道のり

空港から首都へと続く高規格道路。インフラ設備は、決して充実しているとは言えない。



パロ国際空港からデンプーまでの道のり

自然に必要以上の負荷をかけない様、谷に沿う形で道が造られている。そのため峠状の道路になっている。また、トンネルは自然に与える影響が大きいとの判断があり、ブータン国内には無いとのこと。



パロ国際空港からデンプーまでの道のり
州境にある検問所。特に検査等はなかった。



パロ国際空港からデインプーまでの道のり

ルンタと呼ばれる5色の祈りの旗。祈りが風に乗って天や人々に届くと考えられており、風の通る場所に多く見られる。



小売店(空港からデンプーまでの移動の間所々で見かけた道路脇の店)

見かけは、小さな小屋のようなお店だが、農産物や乳製品、生活用品まで様々なものが売られていた。学校から帰ってきた子供達が店番をしていた。



小売店(空港からデンプーまでの移動の間所々で見かけた道路脇の店)

リンゴや唐辛子は、現金収入を得る手段として多く栽培されている。ちなみに唐辛子は、野菜(主菜に近い)という認識で食卓に並ぶことになる。



小売店(空港からデンプーまでの移動の間所々で見かけた道路脇の店)

乳製品は主食であると同時に貴重な収入源になっている。写真はチーズ。



首都ディンブー

ブータン王国首都。山あいの静かな街に見える。既視感を覚えるのは気のせいかな？



デインプー市内

デインプー市内に入ると人も車も多くなる。また、現在は建設ラッシュであり、市内のあちこちで工事が進められている。



デインプー市内

デインプーの町並。車は結構な台数が走っているが、信号機は景観を壊すという理由で設置されていない。



デンプー市内

商店の様子。活気があり、店先まで品物があふれている。



ディンプー市内(くつろぐ犬)

市内には、多くの犬がくつろいでいる。犬は人の生まれ変わりとされ、非常に大事にされている様子。



デインプー市内(くつろぐ犬)

街のあちらこちらでくつろいでいる犬。あまりの無警戒ぶりに少しびっくりする。



ディンプー市内(くつろぐ犬)

死んでいるわけではない、寝ているだけ。



ザブジ・バザール(王制百周年記念市場)

生鮮食品から、香辛料、お香まで様々なものが売られている。この日は、日曜日だったため人は少ないとのこと。



ザブジ・バザール(王制百周年記念市場)

生鮮食品から、香辛料、お香まで様々なものが売られている。



ザブジ・バザール(王制百周年記念市場)

生鮮食品から、香辛料、お香まで様々なものが売られている。



ザブジ・バザール(王制百周年記念市場)

唐辛子は、主食として大量に販売されている。一般家庭なら、一袋あれば一年は持ちそうな気がするがすぐになくなってしまふとのこと。



屋根付きのブータン伝統様式の橋

川に架かる橋は、非常に風通しが良い。そのため橋の内部には、祈りの旗(ルンタ)があちこちに括り付けられている。



民芸品・雑貨類のマーケット

ザブジ・バザールのすぐ側にある、マーケット。仏具や民芸品、衣服や靴、雑貨など様々なものが所狭しと並んでいる。



民芸品・雑貨類のマーケット

ザブジ・バザールのすぐ側にある、マーケット。仏具や民芸品、衣服や靴、雑貨など様々なものが所狭しと並んでいる。



ダ(アーチェリー)

ディンブー市内の国立競技場内で行われていた「ダ」の試合。ブータン男子の嗜みで、休日には頻繁に試合が行われているようだ。



国立織物博物館

2013年6月に開館したばかりの、博物館。伝統織物に関するアカデミーを併設している。ブータンの織物の歴史等を紹介している。前国王の妃(第4夫人)の肝いりで建設された。館内は撮影禁止のため外観のみ。



国立織物博物館

博物館に併設されている工房。伝統工芸保護のため職人を雇用している。ここで創られた織物の一部は、博物館のミュージアムショップで販売されている。



民族博物館

ブータンの伝統的な建築様式の古い農家を改築したもの。ブータンの伝統的な生活様式が再現されているが、館内は撮影禁止。4代目の后(第1夫人)が改修し博物館とした。



パロ市内



パロ市内



パロ市内

パロ・ゾンの退庁時間が過ぎ帰宅する人。



パロ市内

人も牛は帰宅時間。牛は放し飼いされており夕方になうと自分で家に帰っていく。



パロ市内

ちゃんと橋も渡っていく。ちなみに首都デンプーの郊外でも同じ光景を見ることができる。

都市基盤整備の状況から考察

〈概要・道路〉

- 空港から首都ディンブーへの道路は、数年前に比べ格段に整備されたとのことだが、高速道路といわれる道路でさえ、走行車線は舗装されているが状態は決して良好とは言えない。また、一般道では、依然として未舗装の道路が目立つ。また、高速道路もそうだが、路側帯や法面などは全く未整備の状態であり、安全対策も採られているようには見えなかった。

〈概要・都市基盤〉

- 首都ディンブーにおいてはビル建設などが盛んに行われ、都市公園等の都市基盤の整備も進められており、人口の集中も進みつつある。
- 電気や携帯電話の使用に問題はなく、テレビや冷蔵庫などの家電も都市部においては、ほとんどの家庭で使用しているとのこと。
- 首都においては、車の走行量も増えているが、問題になるようなレベルではなく、電気式信号機等も整備されておらず、警察官による手信号の交差点が存在するだけ。ただし、これは、信号機の存在そのものがブータンの街並みにそぐわないとの考え方があるため。

都市基盤整備の状況から考察

〈考察〉

- 日本などの先進国の技術水準や生活水準と比較すると見劣りするとは否めない。しかし、人が生きていくという意味では問題のないレベルであり、むしろ必要十分という印象。
- 携帯電話やテレビの普及またネット環境の整備などにより数年前に比べ格段に外国の情報や文化に触れる機会は増加しているが、それによって、現状への不満が増加しているということはない。

〈所感〉

- ブータン国民は物質的な生活水準の高さが自分たちの幸せではなく、ましてや諸外国との比較など必要がないと考えているように感じた。しかし、決して物質的な豊かさを否定している訳ではなく、自分たちに必要なものかどうかで判断しているように思えた。また、他国の状況にも非常に興味を持っており、日本の事も良く知ってくれていた。決して、情報が遮断された箱庭の中で満足している訳ではなく、私達とは違う価値観の中にいるのだと実感した。

医療体制から考察

2013. 11. 12

伝統生薬研究所

ディンブー市内



伝統生薬研究所(ファーマ・シティカル)

国内唯一の生薬の研究所兼製造工場。スタッフは46名。研究施設、製造工場のほか、専門家育成のための学校や診療所を併設している。



伝統生薬研究所(ファーマ・シティカル)

国内唯一の生薬の研究所兼製造工場。スタッフは46名。研究施設、製造工場のほか、専門家育成のための学校や診療所を併設している。



伝統生薬研究所(ファーマ・シティカル)

国内唯一の生薬の研究所兼製造工場。スタッフは46名。



伝統生薬研究所(ファーマ・シティカル)

国内唯一の生薬の研究所兼製造工場。スタッフは46名。



伝統生薬研究所(ファーマ・シティカル)

生薬の原料のサンプル。植物から鉱石まで幅広く収集されている。



伝統生薬研究所(ファーマ・シティカル)

医療のあり方や治療方法についても仏教の考え方が大きく影響している。



伝統生薬研究所(ファーマ・シティカル)

施設内にある診療所。多くの方が診察を受け薬をもらうために来院している。医療費は無料。

医療体制から考察

〈概要〉

- 医療費は無料。
- 主に漢方薬等を処方する東洋医学が中心、重篤の場合はインドの病院などへ移送する。その場合の医療費も国が負担してくれる。
- 診療所では、対処療法ではなく、チベット仏教の教義に基づく独特の原因療法を行っている。
- ブータンは薬草の宝庫でもある。伝統生薬研究所では国内唯一の製造工場も併設し、漢方の研究と漢方薬の製造を担っている。
- 薬草やそこから生産される漢方薬は輸出品として付加価値が高いと考えられるため、現在薬草の栽培に関する研究を行う準備が進められている。

医療体制から考察

〈考察〉

- 医療費が無料ということもあり、研究所に併設されている診療所には非常に多くの方が詰めかけていた。海外の病院に移送されても費用は国が負担することになっており、安心感は絶大だろうと感じる。しかし、年々増大する医療費が財政を圧迫していることも事実であり、その対応に苦慮しているとの話しも聞いた。また、貴重な薬草を採取することのできる地域であるが、近年は海外からの密採なども問題化している。そのため薬草の栽培技術の研究などを通じて、付加価値の高い漢方薬の輸出を模索していく方針とのこと。しかし、人材も設備も足りていない現状をどのように打開していくのかは非常に興味深い。

〈所感〉

- 医療費の増大はどここの国でも大きな課題とあらためて認識した。しかし、そうした制度のおかげで国民は、病気や怪我に臆することなく活動を行うことができることも事実だと感じる。国がどの水準まで支えるかは別として、医療や介護の負担を全て自己責任としてしまえば、国民が国に対する満足度や安心感を抱くことは難しいだろうと容易に想像できる。

教育現場から考察

- 2013. 11. 12 ペケル・スクール(私立学校)〈ディンブー市内〉
- 2013. 11. 12 下校風景〈パロ市内〉
- 2013. 11. 13 ウーチュ・ローワー・セカンダリー・スクール
(公立小中学校)〈パロ市内〉



ペケル・スクール(私立学校)

デンプー市内にある小学校から高校までの一貫高校。校長はインド人、事務局長は日本人(夫の親族が経営者)。



ペケル・スクール(私立学校)

プリ・プライマリー・スクール(対象年齢は4~6歳)



ペケル・スクール(私立学校)

小学生クラス



ペケル・スクール(私立学校)

高等部1年生に質問、「幸せを感じるときは？」



パロ・ゾンの近くで会った公立学校の生徒

下校中の小学生にあった。おそろいの民族衣装は制服。



パロ市内

子供達の下校風景。



ウーチュ・ローワー・セカンダリー・スクール(公立小中学校)



ウーチュ・ローワー・セカンダリー・スクール(公立小中学校)



ウーチュ・ローワー・セカンダリー・スクール(公立小中学校)



ウーチュ・ローワー・セカンダリー・スクール(公立小中学校)



ウーチュ・ローワー・セカンダリー・スクール(公立小中学校)

教育現場から考察

〈概要〉

- 教育制度は6-2-2-2制と大学。プリ・プライマリースクールと呼ばれる就学前教育が1年。小学校は7歳からの6年間。前期・後期中学がそれぞれ2年あり、その後2年ジュニア・カレッジという構成。
- 義務教育制度はないが、公立学校は無料で、首都ディンブー以外は学用品、給食も無料。ただし制服は個人負担。(公立学校の制服は民族衣装)
- 都市部では私立学校も創設されているが、地方では、まだ未整備の地域が存在する。
- 識字率は、全体で約50%程度。成人教育の遅れが課題。
- GNH教育の実践。(2010年から始められたGNH教育の教育目標は、(1)人を羨ましがらず、足るを知る生活、(2)自国文化への理解、(3)自然を愛する心)
- 地政学的理由から英語教育に力を入れている。

教育現場から考察

〈考察〉

- 首都近郊の私立学校と地方の公立学校を視察したが、設備面では、私学の方がかなり充実しているように感じた。しかし、子供達はどちらも屈託無く勉強が好きでたまらないといった感じだった。
- 公立学校の制服は民族衣装である。自国の文化や伝統の大切さを言葉で伝えるのみならず、この様な形で奨励することは、子供達にとっても自らの文化や慣習を学ぶ上で良いことのように感じられた。ちなみに公務員も公務中は民族衣装の着用を義務づけられている。
- 人口約70万人。ゾンカ語だけでは、あまりにも限定的であるため、英語を積極的に活用しており、国際社会の中で孤立することを防いでいる。しかし、母国語としてのゾンカ語は大切にされている。
- 高等部一年生にそれぞれの幸せについて質問したところ、国が安定し、自分たちがこうして学校に通うことができる。またそうした感覚をみんなで共有できていることがなによりの幸せ。そして、もちろん全員が今幸せだと答えてくれた。幸せの在処、私達の価値観があまりにも利己的になっているのではないかと感じずにはいられなかった。

教育現場から考察

〈所感〉

- 私学と公立の施設の差は大きなものを感じた。そこには明らかに貧富の差や地域間の格差が存在するが、子供達の屈託のない笑顔からは、そうしたものを感じさせない明るさと学習に対する意欲の高さを感じた。
- ブータンの教育現場では、英語教育が特別視されている訳ではなく地政学的な理由や、生活環境(幼い頃から英語やヒンドゥー語の番組を観て覚えてしまう)など必要に迫られてという現状もあり、単純に日本の教育現場と比較し、そのまま反映できるものではないと感じた。
- 自国の文化・伝統を理解するだけでなく、誇りを持って自らのアイデンティティとしてしっかり位置づけていることを感じた。自分たちのなかに共通項として揺るぎないものがあるからこそ、他者と自分とを隔てることなく全体の幸せを考えることができるのだろうかと感じた。

農業の在り方から考察

2013. 11. 13

ボンデ・ファーム(西岡農場)

〈パロ市内〉



ボンデ・ファーム(西岡農場)



ボンデ・ファーム(西岡農場)



ボンデ・ファーム(西岡農場)



ボンデ・ファーム(西岡農場)



ボンデ・ファーム(西岡農場)



ボンデ・ファーム(西岡農場)



ボンデ・ファーム(西岡農場)



ボンデ・ファーム(西岡農場)

農業の在り方から考察

〈概要〉

- ブータンの主産業は農業であり、労働人口の約6割が農業に関わっている。
- 人口の7割が農村地域に居住し、小規模な地域自給自足型の労働集約的農業を中心とした農業に従事している。
- ブータンの農業は本来土地に依らず、作物の出来不出来によって土地を移動しながら行われてきた。そのため、農地の開発はほとんど行われてこなかった。西岡農場、ボンデ・ファームと呼ばれる施設とその一帯は、ブータン農業の振興に生涯を賭した西岡京治氏の試験農場である。現在は、農業機械のメンテナンスや貸し出し、オペレーターの育成など営農指導を行う一方、西岡氏に関する資料も保管・展示している。

農業の在り方から考察

〈考察〉

- ブータンの農村・農業事情から農業振興は、国民の生活向上に直結し、大きな影響があったと推測される。
- 写真からも分かるように整備された農地が山の裾野に広がっている。こうした、農地開発や最適品種の改良また、農業技術の普及と大きな成果を上げている。
- 西岡氏は、ただ与えるのではなく、その土地や人々の現状にあった方法や技術を模索したと聞く。そのことが、現在まで続くこの地域の農業発展の礎になっていると感じる。
- また、農業に止まらず、産業や生活の基盤改善にも現地の人々と力を合わせて取り組まれた。そうした共感に裏打ちされた努力こそが、今なお西岡氏の名声を高めているのだろうと感じる。

農業の在り方から考察

〈所感〉

- 西岡氏の功績により非常に大きな成果があったと聞く。見知らぬ土地へ行きその土地の人々のために働くということは、思うより困難なことだと今更ながらに思う。その功績をブータンの人々は最高の栄誉をもって顕彰して下さっている。あらためてその功績の大きさとブータンの方々の気持ちに感謝と敬意を表したい。

総論

世界一幸せな国。私達が“ブータン王国”に思い描くイメージは当にこれだ。ブータン王国は、GNH (Gross National Happiness: 国民総幸福量)を提唱する国として有名だが、その実態はどのようなものなのか、資料や文献などでは今一つイメージを掴むことができない。

人口約70万人、九州ほどの大きさの国。実際のブータン王国は、特別な国ではなく、夢の国でも幸せの国でもなかった。また、その国は、未開の地でもなく、テレビやネットを通じて普通の人々がごく当たり前に多くの情報を得ることが出来る普通の国であった。しかし、そこで生きる人々は、チベット仏教の教えと敬愛する王と王室の存在を心の拠り所とし、家族や周囲の人々と喜びを分かち合い、健康で過ごすことが出来ることに心から感謝する姿があった。加えて、多くの人々が国の発展に貢献出来ることに喜びを感じ、そのことを誇りとしていた。

一方私達の国や地域は、経済の低迷や少子化、高齢化など様々な課題に直面し、自信を失い、将来に対する希望や夢を見いだす事にさえ躊躇している様に感じる。加えて、価値観が多様化する中で日常生活においても一人一人が十分な満足感を得ることが難しくなっているとも感じる。こうした背景の中で、今後私達は、多くの課題と向き合い、地域の活力を維持するための努力を続けなければならない。活力とは、活動力、生命力のことだ。言ってしまうと地域の活力とは、その地域の持続可能性そのものだ。

しかし、財政的な困難さが付きまとうなかでは、従来の再配分型手法では、行政としての選択肢は限定されたものにならざるを得ない。また、人口規模が縮小していく中で、拡大傾向にあった時代の政策が至当とは限らない。ならばどのようにして、地域の活力ー持続可能性を維持するのか。それには、従来型の価値観とは異なる、別の視点が必要ではないかと感じる。

月次ではあるが物質的な豊かさを求めれば際限は無いが、制限はある。人口規模が小さくなれば当然経済規模も縮小することになる。そうなれば多くの人々を今以上に満足させることは難しくならざるを得ない。

ブータンの人々は、国の発展、経済の発展を望み努力を重ねているように見えた。しかし、同時に自らが作り上げてきた伝統や文化を重視し、それに誇りを持ち自らのアイデンティティとしている。経済的な豊かさだけを求めるのではなく、そこには必ずブータンらしさがあるように感じた。これは、発展途上国故の事なのかもしれない。しかし、私達が戦後の奇跡的な復興・発展のなかで置き去りにしてきてしまったものでもあるように感じる。

私達は、今後、熾烈な地域間競争にさらされる可能性がある。そのとき武器となるのは地域の魅力だと感じる。地域の魅力とは、そこに住む人々の満足度の高さだと考える。満足度は他者との比較に拠れば際限はない。だからこそ相対的評価ではなく絶対的評価に帰結されるものでなくてはならない。そのためには、単なる満足度ではなく、そこで生きていくことが喜びに繋がる幸福度でなくてはならないと感じる。

満足度を幸福に押し上げる要素とはなにか。ブータン王国は、私達からみれば決して豊かな国とは言えない。しかし、国民の大半はその生活に満足し、幸せだと答える。その理由を知るために私達はブータン王国を訪れた。そこで観たものは前述の通りであるが、宗教と王室そして伝統と文化に裏打ちされた、自らと周囲に対する絶対的な信頼感があったように感じる。ブータンは、幸せの国ではなく、どの国にも存在する当たり前の問題、格差問題や自殺問題などを同じように抱え、国民を豊かにするため経済的な発展を目指している。ただその中で揺らぐことのないものを感じる。それこそがGNHの根幹であり、また国民が自らを幸せだと言わしめる要素だと感じる。

私達は今後、一層困難な地域運営を迫られるだろう。しかしその中で、ブータンの人々と同様にしっかりと軸を持ち自分と周囲に自信と信頼を寄せることができれば、私達が取り得る選択肢は増えていくのではないかと感じる。

ブータンの人々が持っているものは決して私達が持ち合わせていないものではない。今は少し隅に追いやられてはいるけれど、決して失ってはいないと思う。地域で生きる一人一人が自分たちの地域に誇りと自信を取り戻すことこそが地域活力の創生であり、地域を持続可能なものにしていく原動力だと信じる。

私達が経済的な発展と引き替えに置き忘れて、隅に追いやってしまったものに再び光を当てることこそが、地域人としての誇りと自信を取り戻すことに繋がると確信している。ブータンでは、そのために特別なことは何も必要ないと学んだ。ただもう一度、私達を構成する様々な要素、宗教や伝統、文化、環境などそういったものに真摯に向き合い、自らが活かされていることに素直に感謝することができれば十分なのだ。その思いが自身や周囲そして地域に対する、自信や誇り、信頼となり、大きな満足感と幸福感を得ることに繋がると信じている。

